

# 結草

kusamusubi

publishing house: moriyama 2-19-52 Kanazawa  
Jodo Shinyu Jhokoji phone 076-852-4922  
www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2012.01.17

## 「聞」老病死を見て、世の非常を悟る

道因寺住職

相馬 豊

おはようございます。今日ですが、昨日も「聞」ということで一貫しておるのですけれども、「真宗の教えを聞く」とこういうふうにいわれましても、自分もそうなので、私が、私たちは、その中で「一体どう聞いていけばいいのだろうか」、「何を聞いていけばいいのだろうか」、「聞いてどうなっていくのだろうか」、聞けば聞くほど分からなくなつて、苦しくなる。それで先輩の方々のところへお訪ねをしたり、友人に聞いたりしたのですけれどもさっぱりわからないですね。

そして、ひとりの先輩のところへ訪ねましたらこう言われました。「どう聞くのか、聞いてどうなるのか、それは他人に聞いてもはじまらないよ」と。「他人の答えを自分のものとして聞いても、それは何んもしっくりこないよ」と。「肝心なことは何を聞くのか、どう聞くのか、その問いを起したのは一体誰なんや」ということを言われました。

「なぜお前は教えを聞こうとしているのだろうか。何を聞こうとしているのか、どう聞くのか、その問いを起したのは一体誰なのですか」

と逆に言われましてハツといたしました。

どう聞けばいいのか、何を聞けばいいのかという問いを起したのは私自身なのです。つまり私自身が苦しみの中から聞いていくことしかできないということです。他人の話聞いて、それで分かるのではなくて、問いを起したのは私自身ですから、この苦しいところから聞いていきなさいということです。「私自身」、「自分自身」といいますけれども、そのことが私たちは本当にはつきりしているのだろうか。

例えば經典に『仏説無量寿経』、『仏説観無量寿経』、『仏説阿彌陀経』という「浄土三部経」と呼ばれるお経さまがあります。そのお経の冒頭には「我聞如是」あるいは「如是我聞」と「聞」という言葉がでてきます。『正信偈』の中にも「重誓妙声聞十方」、「聞信如来弘誓願」とありますように、「親鸞聖人という方はこの「聞」という言葉をとて大切にされた方だと思えます。

先程申しました「浄土三部経」というこれらの經典は、お釈迦様が説いた經典ではなく、お釈迦様が苦しみながら語られた言葉をお弟子の方々が「私にはこういうふう聞いてきてまいりました」と、聞かえてきたところをお弟子の方々が、お釈迦様が亡くなった後に集まつて作られたのです。だから經典というものはお釈迦様が説いた言葉ではなくて、聞いた側の言葉です。經典とは、聞いた人の言葉です。説いた人の言葉ではなくて、「私にはお釈迦様の言葉がこういうふう響いてまいりました、聞かえてまいりました」という聞いた人の言葉、それが經典というものです。

『大経』（『仏説無量寿経』）の中でお釈迦様が一番苦悩した箇所があります。お釈迦様が苦しみ悩まれたこと、それを阿難というお方は「こういうふう聞いてまいりました」と言つて表された言葉が「老病死を見て、世の非常を悟る」（真宗聖典三頁）という言葉が『大経』の中にでてまいります。「老病死を見て、世の非常を悟る」と。これが

お釈迦様の出家の動機だといわれて  
いわれております。王子の位を捨て、  
家族、子供を捨て、いずれは国王に  
なる地位を捨て、財産、権利、権力  
もすべて捨てていった。その大きな動  
機となるのが、この老病死を見た  
ということ。そしてお釈迦様もこ  
の苦しみを持ちながら歩まれた。

お釈迦様は、今からもう二千五百  
年前にインドで誕生された方です。  
現に私たちは、そのお姿も言葉も生  
で聞くことはできません。もしでき  
るならば、インドの仏跡を訪ねるぐ  
らしいかない。実際に二千五百年前  
のお釈迦様と私たちは会うことはで  
きません。しかし、その会うことが  
できないお釈迦様と平成二十三年の  
ここにいる私たちが、共通する苦し  
みを持つているのです。環境も違い、  
時代も違うけれども、私たちと共  
通の認識で、この老病死を見ておる  
わけでしょう。これは紛れも無いこ  
とです。私も二つの眼で、この肌感  
で老病死を見ております。そうす  
ると、この老病死については、お釈  
迦様と現代を生きている私にとって  
は、ひとつの事柄です。

ひとつの事柄として老病死を見て  
いるのですけれども、現代を生きて  
いる私たちとお釈迦様の決定的な違  
いはここです。お釈迦様は、苦しみ  
の中から世の非常を悟ったというの  
ですよ。私たちも老病死を毎日見て  
おります。我が身の老いていく姿を  
見ているし、自分が病になる姿を見  
ているし、いずれ死んでいかなけれ  
ばならない身であるということも分  
かっている。そして家族の老い、友  
人の老い、家族の病、友人の病、多  
くの人の病を見ていて、それを通し  
ながら今日まで数多くの死に遭い、  
死を看取ってきたというものを持っ  
ています。そうすると私たちもお釈  
迦様も老病死は見たのですよ。じゃ  
あ私は老病死を見て、さて私たちは、  
そこから何を学び、何を感じ取り、  
何を受け取っているのでしょうか。

ただ具体的に死というものを見る  
ならば、身近な人、愛しい人、大切  
な人の死を看取って号泣し、崩れ果  
てていた、ただそれだけではないは  
ずです。悲しみに遭い、ただ泣いた  
だけではないはず。私たちは人の  
死というものと向き合い、何を自

分のものに取り入れてきたのだろう  
か。それを訪ねることが、あとに残  
る者のひとつの大きな役割ではない  
でしょうか。

日本の言葉に「息を引き取りまし  
た」という素敵な言葉があります。  
これ素敵な言葉なのです。でも現代  
の私たちは、素敵な言葉だと捉えま  
せん。息を引き取りましたと聞けば、  
「ああ臨終かな」、「亡くなったのか  
な」と、こういう受け止め方です。  
しかしこの言葉は日本語として素敵  
な言葉なのです。「えっ、どこが素敵  
なのだろうか?」。素敵なのですね、  
これが。「引き取りました」というこ  
とです。「引き取りました」というの  
は何かというと、受け取りましたと  
いうことです。または受け継ぎまし  
たということです。それでは何を?  
当然ここにある息です。息というの  
は、これは最期の息です。「あなたの  
最期の息を受け取りました、受け継  
ぎました」。最期の息を受け取ったと  
いうことは、何を言いたいのか。  
私たち一人ひとり、死にたくな  
いのです。正直死にたくないです。  
どこまでも生き続けたいのです。生

き続けたい思いはあっても、息を引  
き取っていかねければならない。そ  
の生きたい、生きたいと意欲を持  
ちながら人は亡くなっています。そ  
の「息を受け継ぐ、受け取りました」  
というのは何かというと、「あなた  
の生きたいと思っていた意欲、また  
志半ばにした願い、志をあとに残る  
私はちゃんと受け取りました、受け  
継いで歩んでいきます」ということ  
です。あなたの最後の息だけでなく  
て、あなたが歩もうとした願い、志  
はちゃんと私があとを引き受けてい  
きます、継いでいきます。これがあ  
とに残る私たちの務め、役割です。

そうしますと、今日まで多くの方、  
特に家族の別れの中で、ちゃんと先  
に亡くなった方の志を持ちながら、  
一日一日歩んでおられますか? 悲し  
みだけではないのですよ。受け取った  
ものがあるのですよ、私たちに。  
受け取ったものを大切に、大切にし  
ながら、「あなたは亡くなったけれど  
も、あなたの志や願いは、ちゃんと  
自分のあり様、暮らし方あるいは生  
き方のうえで反映いたしますよ、守  
りますよ」、それが息を引き取るとい





たのです。いつまでも生きられると思っておるのです。でも命の事実はそうではない。いつまでも生きられると思うこと自体が余裕と油断やということなのです。逆に今しかありませんよ、と。ここに生き続けてきたあなたは、亡き方から大切な事柄を受け取っているはずですよ、と。その生をあなたは喜びをもって、自分自身輝かせていますか、ということなのです。その生と向き合わなければならぬ。このことを經典の中の仏弟子の方々が、「苦惱の中からこういうことを教えられました」、「私たちはこういうふうに聞きました」と。そこで改めて、なぜ私たちはここで教えを聞くのだろうか。聞かなければならないのは、なぜか？それは人間に生まれてきたからですよ。

私もこの聞くといことで悩んだ時のことです。道因寺どういんじの毎月のお参りに足を運んでくれた大先輩のおぼあちゃんがいるんですね。もう九十も回っておりませうけれども、今でもご健在です。そのおぼあちゃんに聞いたことがあるのです。「私、聞いても、聞いてもわからないのやけども、どう

したらいいんか」と聞いたたら、おぼあちゃんは即答しました。「そんなことわからないのか」と。「うん、わからないのや」と。「人間やからや」と言うのです。「人間やから聞くんやがいね」と。そんなわかる、わからないもんじゃないんや、人間やから聞かないかんのやと。「はあく」と思いましたね。流石人生の先輩やなど。ちゃんとそういうふうにして人間だから聞かなければいかんなんというものを感ずるのですよ。その感じ取っている証が、まさに生きている証です。

だから単に私たちは生老病死、四苦しくという言葉を知っていて、老病死も全部漢字で書けると思っておるけれども、いくら書けたとしても領けんのですよ。だから今ここにおられる皆さんも私の話を聞いているはずですけど、領けないはずですよ。けん証拠しんじゆがあります。ここで今、命を終えてもいいと思う人、ちょっと手を挙げてください。手が挙がらないうこととは、死にとうないということです。ここで死にとうない。事実はこうだけど、思いはこの浄光

寺の本堂では死にとうない。這うこでも家へ行きたいはずですよ。つまり私たちの中にあるのは、どこまでたつても自分の思いしかないということなのです。自分の思いでしか聞けないのです。

ところが親鸞聖人はこう言いました。「この自分の思いが破られる時必ずきますよ。それが目覚めです」と。「自分の思いで生きてきたことが、よきひとと遇うことによつてはじめて思いが破られました」と。だからそれを後にお弟子の唯円ゆゑんという方が『歎異抄たんにしやう』に親鸞聖人の言葉をかき集めました。あの唯円という方もすごいですね。何がすごいかというと、何と唯円は親鸞聖人が亡くなつてから二十年后に『歎異抄』を書いたのですよ。皆さんは二十年前に出会った人の言葉を憶えていますか？私は憶えてません。でも唯円という方はちゃんと耳の底に残したというのです。それは百分の一にも満たないけれども、在世の頃、聖人はこういうふう語られましたと、耳の底に残っている言葉呼び起こして書いたのが『歎異抄』ですよ。その

『歎異抄』の中に親鸞はこう言いました。自分の思いが破られて、その破られた時にひとつの世界が見えてきますよ。どんな時？「念仏もうさんとおもいたつころのおこるとき」(真宗聖典六二六頁)です。「念仏もうさんとおもいたつころのおこるとき」はじめて領けますよ、と。必ず時が来るのです。自分の思いだけで生きていますが、その思いが破られる時が必ずあります。それを人間だと親鸞は教えています。だから私たちにも時が来るのです。その時を聞いていかなければならない。

でも私たちは悲しいのです。領けないという悲しさを持っています。悲しい存在です。でも親鸞聖人あるいはお釈迦様、仏さまはこれを怒っているわけではないのです。話はわかるけれどもなかなか領けない、それを怒っていないのです。「悲しい存在ですよ」と。「だからこそ聞いてくださいいね」というのです。「迷える衆生よ、孤独を抱え、苦しみ悩み悲しみを抱えている者よ。命終わらんとする者よ、念仏申してくれよ」というのです。悲しい存在として認め

